

パネルディスカッション

ICTを活用したことばの教育-子どもへの日本語・教科学習支援における実践的展開から

本パネルディスカッションの趣旨

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

1. 本パネルディスカッションの目的

教育施策として打ち出された GIGA スクール構想等による学校現場における教育活動のデジタル化・オンライン化は、コロナ禍における必然性により、急速に進展してきた。多様な言語文化背景をもつ子どもの日本語教育や教科学習支援、また、異文化適応などの支援活動においても、ICT を活用したオンラインによる支援やデジタルツールを利用した指導の取り組みが数多く見られるようになってきている。そこで、本パネルでは ICT を活用した日本語教育の実践例や、オンラインシステムを利用した外国人児童生徒等の日本語支援活動の例や、生徒の学習を評価・管理している実践事例を報告する。さらに、海外の情報リテラシーを活用した言語教育の状況について情報提供をし、ことばの教育における ICT 活用の可能性について検討する。

2. 構成

実践事例として報告を3件と情報提供1件により、次のように構成する。

- 趣旨説明 コーディネータ 齋藤ひろみ（東京学芸大学）
- 実践例1 教科と日本語の統合学習における ICT の活用
—「算数科」の課題場面の提示において—
衛藤景太さん（板橋区立板橋第八小学校）
- 実践例2 地域支援教室におけるオンライン支援の可能性
—オンラインによる日本語学習支援の仕組みと方法—
田所希衣子さん（仙台市 外国人の子ども・サポートの会）
- 実践例3 生徒の自律的な学びを育む「ICTを活用した個別の指導計画」
—教師間の連携をどう生み出したか
能城黎さん・川上さくらさん（啓明学園高等学校教諭・NPO 法人カタリバ）
- 情報提供 言語教育における ICT 活用の現在—海外の実践事例をもとに—
米本和弘さん（東京医科歯科大学）

3. ディスカッションのポイント

本パネルで紹介する実践事例や情報をもとに、次の3点からことばの教育における ICT 活用の可能性について議論したい。

3.1 ICT 活用の特性を生かした教育実践

急速なデジタル技術とインターネットの発達によって、私たちのコミュニケーションのあり様も情報伝達の様式や方法も大きく変化した。それを言語教育の問題解決にどのように活用・利用することが、子どもたちのことばの発達にとって有益なのか。本パネルの実践事例をもとに検討したい。

参考として、下に「2020年代に向けた教育の情報化に関する懇談会 最終まとめ」で教育における ICT 活用の特性・強みとして挙げられている3点を紹介する。衛藤実践の算数の課題場面の提示、田所実践のオンラインの支援、能城・川上実践のポートフォリオと個別の指導計画作成は、いずれの特性を機能させているのであろうか。また、子ども及び教育者・支援者にとって、どのような学習環境、あるいは教育・支援環境を創り出したのだろうか。

- ① 多様で大量の情報を収集、整理・分析、まとめ、表現することなどができ、カスタマイズが容易であること（観察・実験したデータなどを入力し、図やグラフ等を作成するなどを繰り返し行い試行錯誤すること）
- ② 時間や空間を問わずに、音声・画像・データ等を蓄積・送受信でき、時間的・空間的

- 制約を超えること（距離や時間を問わずに児童生徒の思考の過程や結果を可視化する）
- ③ 距離に関わりなく相互に情報の発信・受信のやりとりができるという、双方向性を有すること（教室やグループでの大勢の考えを距離を問わずに瞬時に共有すること）

3.2 ICTを効果的に活用した学習場面

次に、ICTの活用によって、子どもたちの学びの質はどのように変容しうるのかを議論したい。報告された実践において、どのような学習局面でどのように活用することによって、子どもたちは内容へのアクセス（理解）、分析、評価、創造が促され、そうして学んだことをもとに自己を表現し、どのような行動ができるようになったのだろうか。

文部科学省（2020）は、ICTを効果的に活用した学習場面として、次の10の場면을提示している。参考までに紹介する。

一斉学習	個別学習	協働学習
教師による教材の提示 (A1)	①個に応じた学習 (B1) ②調査活動 (B2) ③思考を深める学習 (B3) ④表現・制作 (B4) ⑤家庭学習 (B5)	①発表や話し合い (C1) ②協働での意見整理 (C2) ③協働制作 (C3) ④学校の壁を越えた学習 (C4)

3.3 ICTの活用によることばの教育の可能性

ICTの活用で子どもたちの「わかった」という表情を目にすることは多くなった。また、デジタルスキルの高い子どもたちは、そのスキルを駆使してマルチにメディアを活用して伝達ができるに違いない。しかし、ICTの活用によることばの教育が可能にするのは、知識・スキルの効率的な習得や高度な思考といった技術的・認知的な側面だけなのだろうか。最後に、時間が許すようであれば、ことばの教育に関わる者として私たちは、ICTの活用をも含め、メディアを利用するリテラシーとしてどのような力を育もうとしているのかを、改めて問い直したい。

ユネスコはメディアリテラシー、情報リテラシーを融合した包括的な概念として「情報メディアリテラシー」を推進している。「批判的、倫理的、効果的な方法によって、あらゆる形式の情報・メディアコンテンツに、様々なツールを使って、アクセスし、検索し、理解し、価値判断して活用し、創造し、共有するための一連のコンピテンシーで、市民が個人的、職業的、社会的活動に参加したり携わったりすることをエンパワーするもの」（UNESCO2013, 中植・森山2021による訳）と定義される。また「公共の利益のために情報を理解すること、持続可能な開発に参加するために情報、メディア、デジタルコミュニケーションを批判的に活用すること、基本的人権の恩恵を最大限に求め、享受すること、といった能力を市民に身につけさせるものである」

（Grizzleら2021、村上2022による訳）という。ここにヒントがありそうである。

【参考文献】

教育の情報化に関する懇談会（2016）「教育の情報化に関する懇談会 最終まとめ」
https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/07/_icsFiles/afi（2023年2月28日閲覧）

坂本旬（2022）「第3章メディアリテラシーの本質とは何か」坂本旬・山脇岳志（編）『吟味思考を育むメディアリテラシー』時事通信社

中植正剛・森山潤（2021）「ユネスコのメディア情報リテラシーにおけるコンピテンシー概念の整理」『教職課程・実習支援センター研究年報』神戸親和女子大学教職課程・実践支援センター

村上郷子（2022）「第4章 ユネスコによるメディア情報リテラシーの挑戦」坂本旬・山脇岳志（編）『吟味思考を育むメディアリテラシー』時事通信社

文部科学省（2020）『教育の情報化に関する手引—追補版— 第4章教科等の指導におけるICTの活用』
https://www.mext.go.jp/content/20200701-mxt_jogai01-000003284_005pdf.pdf（2023年2月28日閲覧）

Grizzle, A., Wilson, C., Gordon, D., Eds, *Media and Information Literate Citizens Think Critically, Click wisely! Media & Information Literacy Curriculum For Educators & Learners*
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000377068>（2023年2月28日閲覧）

UNESCO（2013a）*Global Media and Information Literacy Assessment Framework: Country Readiness and Competencies*,
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000224655>（2023年2月28日閲覧）